

一般社団法人 埼玉県経営者協会会報

埼経協ニュース



8・9

17 月号

平成二九年度埼玉経協・海外社会経済視察団視察報告

『商業・物流・観光で急成長を遂げるドバイと最後のフロンティア』 アフリカで高い経済成長を遂げるタンザニアを視る』



ナキール社にて（マリア・アブダラハムマネージャー(中央)を囲んでの記念撮影)

〈はじめに〉

三七回目を迎える今回の社会経済視察は、『商業・物流・観光で急成長を遂げるドバイと最後のフロンティア』アフリカで高い経済成長を遂げるタンザニアを視る』をテーマに、七月一日(土)〜八日(土)の日程で実施いたしました。

ドバイはアラブ首長国連邦(UAE)の経済の中心で、金融センターなどの経済的な中枢機能が集積するグローバル都市であり、多様なフリーゾーン(経済特区)の設立や、空港や湾岸開発などのインフラ整備の推進により、商業・物流・観光分野において急成長を遂げています。

後半の日程では、「最後のフロンティア」として世界的にアフリカへの関心が高まる中、経済成長著しい新興市場として注目を集めるタンザニアのインフラ事業や現地進出企業を視察しました。

また、タンザニアはキリマンジヤロ山やビクトリア湖等の豊かな

自然と貴重な野生動物の宝庫であり、観光を始めとする開発事業と環境保全との両立も同国の課題となっています。今回は野生動物保護区でのサファリも実施しました。視察ではまずドバイを訪れ、人工島のパーム・ジュメイラ、世界一の高さを誇るバージュ・カリファビル、ドバイで一番アラブの歴史が残るバスタキヤ歴史地区等を視察しました。その後、政府系デイベロップパーのナキール社とジェトロ・ドバイ事務所を訪問しました。

視察後半ではタンザニアに向かい、タンザニア最大の経済・商業都市であるダルエスサラームにて、在タンザニア日本国大使館、現地進出企業のパナソニック・エナジー・タンザニア、JICAタンザニア事務所を訪問しました。タンザニアの経済や産業構造、ビジネス環境や日本のODAの状況について、視察団からの質問を交えた意見交換を行いました。

《ドバイ編》

【概要（基礎データ）】

アラビア湾の入口に横たわるアラブ首長国連邦（UAE）は、アブダビ、ドバイを始めとする七つの首長国から構成されています。（石油・経済開発は各首長国の権限）

UAE第二の都市ドバイは、早くから石油資源ではなく、観光資源の開発に注力し、世界有数の観光都市並びに金融センターのひとつとなりました。人口の八割近くが出稼ぎ労働者を含む外国人であ

り、世界各国の企業が進出し、日本企業も二五〇社以上に達しています。

○人口：約二四四万人

（二〇一六年）

（内訳）UAE国民一五%

外国人八五%

○面積：約四一―四四km

（埼玉県とほぼ同じ）

○名目GDP：約九〇九億米ドル

○首都：アブダビ

○言語：公用語はアラビア語

（英語も広く使われている）

《ドバイを取り巻く現状》

羽田空港から直行便で約一時間、経済成長を続けるドバイは、超高級ホテルやデザイン性の高い高層ビル、巨大ショッピングモールが建ち並ぶ一方で、ドバイの歴史が色濃く残るオールドドバイエリアで歴史巡りを楽しむこともできます。ドバイでは、二〇二〇年のドバイ万博を見据えて、



2020年のドバイ万博を控え、至るところで建設工事が行われている

ホテルやショッピングモールなどの建設工事が至るところで行われています。

ドバイ総人口の一五％程度の自国民（アラブ人）は、不動産の賃貸収入や外資系企業からのスポンサー料など不労所得を得ており、政府からも生活関連の補助があります。建設現場では、主にインドやパキスタン、バングラデシュといった南アジアからの外国人労働者が多く働いており、数々の巨大プロジェクトは豊富な外国人労働

者に支えられています。

一方で、外国企業が活動しやすい環境を整えるため、二〇以上のフリーゾーンを設立しています。

フリーゾーンでは、外資一〇〇％の会社設立が可能であり、ローカルスポンサーも必要ありません。資本、利益を一〇〇％本国へ送金することもでき、多くの規制緩和とドバイの地理的利点の相乗効果で、現在最も大きなフリーゾーンである「ジエベル・アリ・フリーゾーン」には約七三〇〇の国内外の企業が進出しています。

ドバイは、石油資源に依存するのではなく、外資誘致や観光レジャーの振興、ドバイ国際空港を始めとする交通インフラの整備といった経済の多角化を進め急速に発展してきました。

ドバイは、石油資源に依存するのではなく、外資誘致や観光レジャーの振興、ドバイ国際空港を始めとする交通インフラの整備といった経済の多角化を進め急速に発展してきました。



車窓から見るドバイの市街地



七つ星のバージュ・アル・アラブホテル



伝統的な建築や装飾の建物が立ち並ぶバスタキヤ歴史地区



人工島に浮かぶアトランティスホテル前にて

▶アブラに乗って地元の人を訪れる
オールドスークへ



地上828メートルの世界一の超高層ビル バージュ・カリファからの眺望



視察では、まず人工島のパーム・ジュメイラを訪れました。ナキール社が開発を手掛けた椰子の木型の人工島に、高級ホテル、別荘、商業エリアが広がり、現在も開発が進められています。その後、歴史的建造物を保護しているバスターキヤ歴史地区を訪れ、昔ながらの家が並ぶ中に、風通しのよい造りや木製の扉が残されていました。ここからアブラという、クリーク（入江）を行き来する渡し船に乗り、地元の人もスパイスの買い

付けに行くというスーク（市場）を訪れました。乗船中は、クリークを挟んで伝統文化と現代技術が交差する沿岸線の街並みを楽しむことができました。その後、地上八二八メートルの世界一の高層ビル、バーージュ・カリファに向かい、展望台では、タワーの完成に至る過程に触れながら、ドバイ中心部を一望し、建設現場が所々広がる、いまなお進化し続ける光景を見ることができました。

この人工島は、「パーム・アイランド」と呼ばれ、「パーム・ジュメイラ」「パーム・ジュベル・アリ」「デイラ・アイランド」の三つの島から構成されている。さらに「ザ・ワールド」は、上空から見ると世界地図を模した人工島であり、土地購入者が一定のルールに従



政府系ディベロッパー ナキール社

＜ナキール社訪問＞
ナキール社はドバイを拠点とする政府系不動産デベロッパーであり、人工島、超高層ビル、ホテル・リゾート、複合商業施設など数千億円から兆単位のプロジェクト開発を行っています。当日は、海外使節団担当マネージャー、マリア・アブドラハム氏から当社の戦略や展望について説明していただきました。

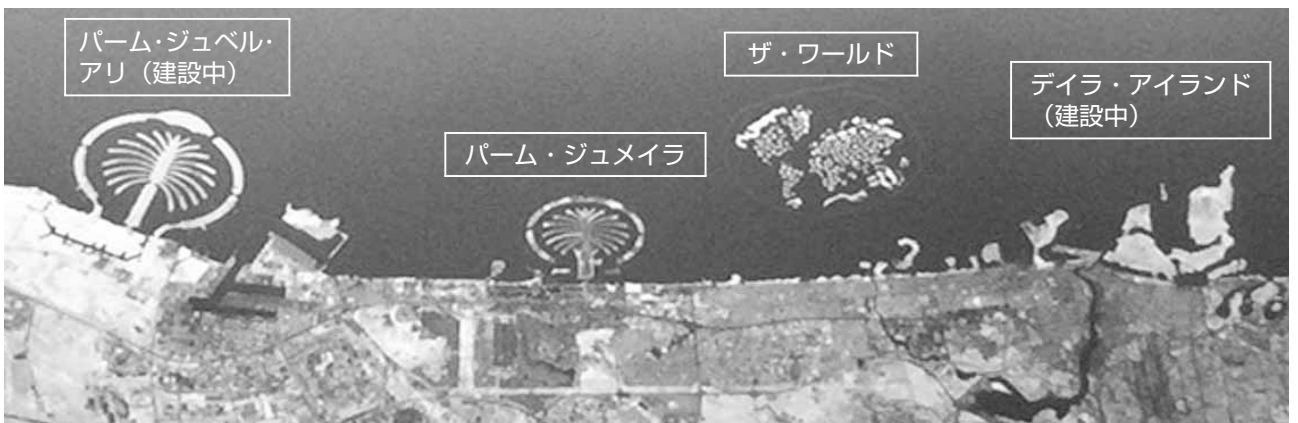
◆レクチャー概要

ドバイの海岸線は、地図上ではわずか七〇キロメートルしかなく、面積を拡大するために埋め立てによる人工島の開発を行い、約八〇〇キロメートルの海岸線の拡張に成功した。

一方、デイラ・アイランドはファミリ層を対象としている。ホテルも三〜四つ星が中心で、ナイトスーク（夜店）が魅力のプロジエクトである。

人工島の開発にあたっては、建物の建設を行う。パーム・ジュメイラの部分は戸建てになっているが、売り出し後に即完売し、投機的要素もあり、価格が一時高騰した。防波堤部分のホテルも続々とオープンしており、現在はショッピングモールやタワーなど商業施設の開発に注力し、一大リゾート地と位置付けている。

▶ナキール社が手掛けた人工島
海岸線の延長に成功した



《タンザニア編》

ドバイから飛行機で約五時間半、タンザニア最大の経済・商業都市ダルエスサラームに向かいました。

【概要（基礎データ）】

一九六一年にイギリス信託統治領から独立したタンガニカ（タンザニア本土）と一九六三年に独立したザンジバルが一九六四年に合併して成立した連合共和国です。ニエレレ初代大統領の進めた民族融和政策が奏功し、独立以来クーデターの発生もなく政治が安定しており、過去一〇年以上にわたるGDP平均七%の成長を維持しています。



スーパーは少なく露店で買い物する現地の人々

- 人口：約五五七二万人
(二〇一六年世銀)
- 面積：約九四・五万km²
(日本の約二・五倍)
- 名目GDP：四七四億米ドル
- 首都：ドドマ

商都はダルエスサラーム
○言語：スワヒリ語（国語）、英語（公用語）



慢性的な道路渋滞（ダルエスサラーム）

《タンザニア日本国大使館訪問》

在タンザニア日本国大使館は、ダルエスサラームに位置し、タンザニア政府との交渉や連絡、政治・経済その他の情報の収集・分析、日本を正しく理解してもらうための広報文化活動等を行っています。当日は、吉田雅治特命全権大使から、タンザニアの政治・外交・経済及び日本との関係について説明していただき、質疑応答を交えてタンザニア経済の現状や今後の可能性について理解を深めました。

◆レクチャー概要

タンザニアは、他の周辺国と比べて政治が安定しており、一〇年連続で平均七%の経済成長を遂げてきた。

主要産業は、サービス(三三%)、農林水産(二二%)、観光(一三%)、建設(一二%)であり、雇用の要となる製造業の比率が低い。最近では、キリマンジャロ山を始めとする豊かな自然を中心に、観光にも力を入れている。今後は天然ガスの開発も期待されている。

アフリカ有数の農業国であり、食料自給率は一〇〇%を超え、国民の六割以上が農業従事者である。都市部では路上で物品売買をしている若者が多く、人口が増えていく中で、安定した雇用先が必要となる。

対日貿易では、金や銀、農産物ではコーヒーやゴマが輸出されており、輸入品目は中古自動車が増えている。

タンザニアは、近隣諸国（ブルンジ等）から多くの難民を受け入れている。また、最近ではEAC（東アフリカ共同体）の本部を誘致し、経済を始めとして、地域統合へ歩み始めている。

主要進出日本企業は、商社・メーカー・建設等、約一七社である。

日本の政府開発援助（ODA）の受取額もサブサハラアフリカ（サハラ砂漠以南）内で一位となっており、現在もダルエスサラーム市内の主要道路の整備等も行い、経済成長に貢献している。

※レクチャーの後、視察団から、日本企業のプレゼンスやイメーヂ、中国との関係性、首都ドドマへの移転施策、また、失業率や保健施策の話題など、多方面にわたる質問が次々と出され、活発な意見交換が行われました。



在タンザニア日本国大使館にて（吉田特命全権大使（前列左から2番目）を囲んで記念撮影）



日本車は人気であり、街でもよく見かけた



パナソニック・エナジー・タンザニアにて
(森社長(前列右から3番目)を囲んでの記念撮影)

〈パナソニック・エナジー・タンザニア訪問〉

パナソニック・エナジー・タンザニアは、数少ない外資系電気機器メーカーであり、一九六八年の創業から間もなく五十年が経過しようとしています。

当日は、森克彦社長からタンザニアの経済情勢や企業動向について説明していただくとともに、工場見学も行いました。

◆レクチャー概要

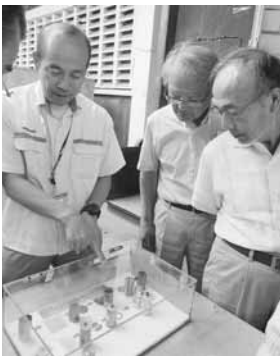
タンザニア政府は二〇二五年に工業GDP貢献率を現在の二五%から四〇%に上げることが目指している。

しかし、タンザニアの電化率は全体で約三三%とまだまだ低い。また、製造業におけるタンザニアの賃金が他のアフリカ諸国と比較すると高い方であるため、新規進出が難しくなっている。

タンザニアにおけるアジア企業の動向をみると、中国企業は建設・通信分野、韓国企業は家電・電子機器分野に参入している。

当社では、約一五〇人の従業員とともに、主にラジオや懐中電灯に使われるマンガン乾電池の製造・販売を行っている。昨年度は、タンザニア国内向けに単一マンガン・単三マンガン乾電池を各三〇〇万個生産した。

当社の製品は、中国製と比べると、コストパフォーマンスは高いが小売価格差が大きく、厳しい状況にある。

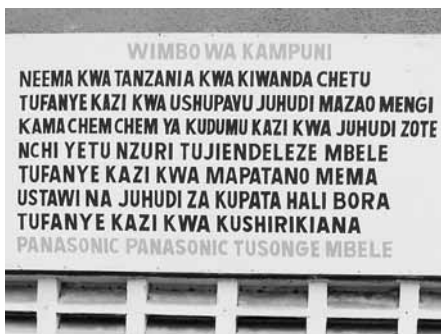


▶製造工程の説明

況にある。また、密輸が横行しており、政府には是正要求を行い、若干は改善してきたものの依然として多く流通しており、ビジネス環境の整備も課題となっている。



タンザニアでのビジネス展開について多くの質問が出された



スワヒリ語で書かれているパナソニック社訓



亜鉛缶工程を経て、組み立て・仕上げ工程のエリア

〈JICAタンザニア事務所訪問〉

タンザニアは、一人当たりGDPが八七九米ドル(二〇一六年)とまだまだ低く、最貧国(後発開発途上国)と言えます。JICA

では、一九六七年に青年海外協力隊の派遣を開始し、累計一五〇〇名を超えています。また、進出する日本企業に対して、情報提供、諸手続きの側面支援や広報、地方展開まで幅広い支援を行っています。

当日は、長瀬利雄所長からタンザニア概況とJICA民間連携事業について、梅津径氏からアフリカの若者のための産業人材育成政策である、ABEイニシアティブについて説明していただきました。

◆レクチャー概要

ここ数年、建設・情報通信・金融サービス業が一〇%を超える高い成長率を達成している。

タンザニア国内でも急速にICT(情報通信技術)およびモバイルマネーサービスが普及している。

近年、五大企業グループと呼ばれる地場企業が急激に勢力を増しており、成長及び雇用面で重要な役割を果たすとともに、近隣諸国への輸出も手掛け、タンザニアを代表する企業グループに育ちつつある。

日本企業は、現地生産も含めた



ODA でつくられた魚市場は競りも行われていて活気がある



ダルエスサラーム市内にて渋滞解消のために現在建設中の立体交差橋

BOP層 (Base of the Economic Pyramid)・中間層の市場開拓やインフラ・プラント関連で活躍している。現在もダルエスサラーム市内の道路の渋滞解消のために、立体交差橋を建設している。

これまでの民間連携事業を踏まえて、現地での信頼できるカウンターパートをどう育成するか、不



電化率が低く供給も不安定であるため、視察中も一時的に停電があった

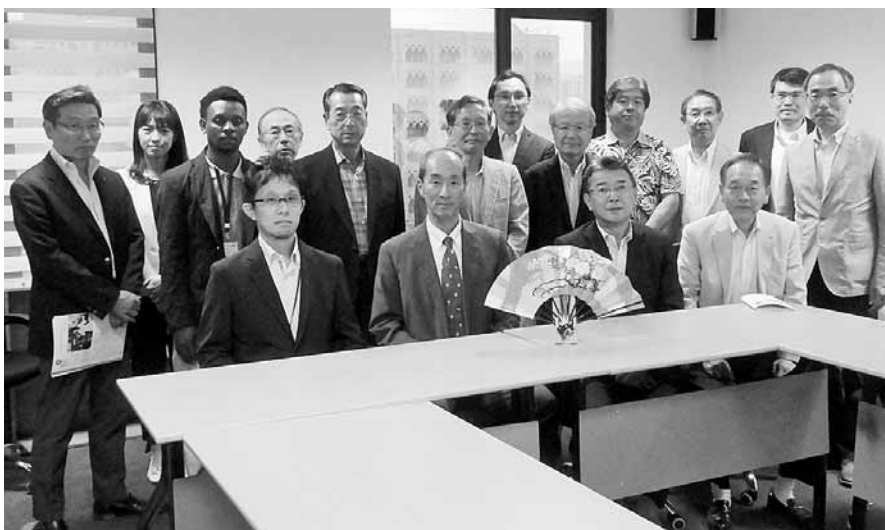


JICA の事業説明を行う長瀬利雄所長

透明な法制度や手続きの遅さ、現地のニーズに合わせたビジネスモデルの開発が課題として挙げられる。

また、広大な国土と人口密度の低さも課題となるが、最近では東京大学発のベンチャー企業、Dai-ichi Kangin 社の無電化村地域における売電システム事業のように、遠隔技術やモバイルペイメントを活用し、距離の壁を超えて事業展開を行っている好事例もある。

※レクチャーの後、視察団から、



JICA 事務所にて
(長瀬所長 (前列左から 2 番目) 梅津氏 (左から 1 番目) を囲んで記念撮影)

今後のビジネス展望や ABE イニシアティブの派遣について質問が出され、意見交換を行いました。

「おわりに」

今回の視察では、ドバイ万博に向けて、さらなる成長を目指しているドバイを訪問し、埼玉県とは同じ面積のコンパクトな都市国家でありながら、観光事業のスケ

ールの大きさと多角的な経済戦略を実感する貴重な機会となりました。

タンザニアにおいては、街に若者が溢れ、活気を感じるとともに、ICT を活用した今後の発展にも期待が膨らみました。

様々な視点から日本とは異なる両国の経済や文化に触れながら理解を深めることができ、非常に有意義な視察となりました。

視 察 団 参 加 者 名 簿

(敬称略/順不同)

| 氏名 | 所属・役職名 | 氏名 | 所属・役職名 |
|-------|--------------------------|-------|------------------------|
| 上條 正仁 | 株式会社埼玉りそな銀行 シニアアドバイザー | 戸所 邦弘 | 富士倉庫運輸株式会社 取締役社長 |
| 細沼 哲夫 | 日本伸管株式会社 代表取締役会長 | 海野 格 | AGS 株式会社 執行役員 |
| 利根 忠博 | 一般社団法人埼玉県経営者協会 名誉会長 | 早崎 寛 | ティ・シー・アイジャパン株式会社 代表取締役 |
| 荻野 芳朗 | 株式会社ピッルスコーポレーション 代表取締役会長 | 廣澤 健一 | 一般社団法人埼玉県経営者協会 常務理事 |
| 小高富士夫 | むさし証券株式会社 取締役社長 | 白井 智也 | 一般社団法人埼玉県経営者協会 研究主幹 |
| 河野 経夫 | 株式会社第一住宅 代表取締役会長 | 山口由美子 | 一般社団法人埼玉県経営者協会 主任研究員 |
| 川鍋 宏 | 株式会社タムロン 常務取締役 | | |

Photo Album



1978年建立の大型モスクでドバイの中で一番大きく一番美しいモスクとして知られている。このモスクはドバイにあるモスクの中で唯一、異教徒でもモスク内が見学できる

▶ 124階にある展望台からドバイを一望



▶ アラブ料理



▶ 観光名所であるゴールドスーク



Dubai

ドバイモールは展望台バージュ・カリファも隣接している世界最大のショッピングモールであり、水族館やアイススケートリンク設備も完備している

Tanzania



博物館にいた現地の学生



国立博物館では第一次世界大戦の資料やアラブ支配時代の遺品が展示されている



タンザニアの主な観光事業であるサファリも体験（セルー動物保護区）



大通りから少し入っても賑わっている



大量の絵や民芸品が店前に並ぶ



第一次世界大戦でドイツ軍に参戦した兵士の記念碑



ダルエスサラーム市内から車で15分ほど行くと海岸に着く



サファリではキリン、カバ、インパラ、ヌー、ライオンなど30種類以上の野生動物に出会えた。キャンプ場ではマサイ族も警備スタッフとして常駐